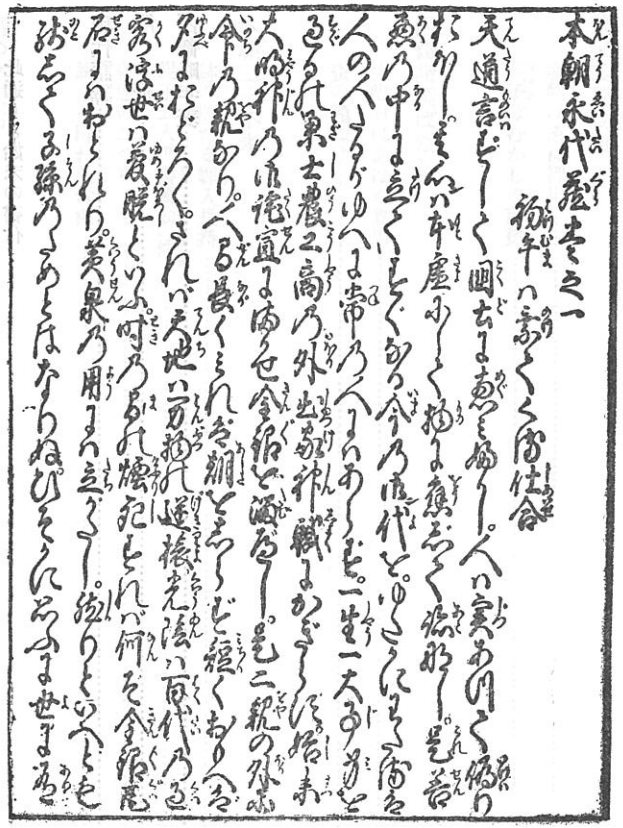
日本永代蔵
初午は乗てくる仕合……一
世界の借屋大將……四
煎じやう常とはかはる問樂……九
祈るしるしの神の折敷……一三
智惠をはかる八十八の升掻……一六

世間胸算用
問屋の寛潤女……二〇
鼠の文づかひ……二三
神さへ御目違ひ……二七
つまりての夜市……三一
才覺のぢくすだれ……三五
平太郎殿……三九

西鶴織留
鹽うりの樂すけ……四五

何にても知惠の振賣……四九
武家義理物語
我物ゆゑに裸川……五三
癖子はむかしの面影……五六
西鶴諸國ばなし
大晦日はあはぬ算用……六〇
蚕の籠ぬけ……六三
本朝二十不孝
跡の剋たる娌入長持……六六
親子五人仍書置如レ件……六九
善悪の二つ車……七三
胸こそ踊れ此盆前……七七

萬の文反古
代筆は浮世の闇……八〇
此通りと始末の書付……八四
現代語譯……八九
解　説……一三三
西鶴略年表……一三七



（原本影印）

○初午―二月の最初の午の日。この日は普通には稲荷社の祭日であるが、こゝは水間寺觀音の緣日をさす。
○天道言ずして―古文眞寶後集「天道不レ言而品物亨、歲功成者何謂也」。（天道は物は言はないが、地上の萬物の生は亨通し、四時は移り變って一歲の功が成るのは何の故ぞ）
○其の心は本虛にして―古文眞寶後集「心兮本虛、應レ物無レ迹」。（人の本心は本來空虛で、外物に應じていかようともなる）。
○人の人たる―人の中の人。すぐれた人。
○始末大明神―「始末」は儉約の意。儉約の神格化。神職の緣。
○天地は萬物の逆旅―古文眞寶後集「夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮世若レ夢」（李白）。
○時の間の煙―暫くの間に火葬の煙となる。
○黃泉―死後の世界。あの世。
○五つ有り―地水火風空をいう。又は、骨肉血筋氣。人體をなす要素。人間の生命。
○寶船―七福神をのせた船の繪で、節分の夜枕の下に敷いて寢る。こゝは寶の意。
○見ぬ嶋―人の見たこともない嶋。鬼が嶋。
○隱れ笠かくれ簑―これを着ると、身を隱すことができるといわれ、鬼が島の寶とされた。
○世の仁義―世間の道德。義理人情。

日本永代藏

○初午は乘てくる仕合

天道言ずして國土に惠みふかし。人は實あつて僞りおほし。其の心は本虛にして物に應じて跡なし。是れ善惡の中に立つてすぐなる今の御代を、ゆたかにわたるは人の人たるがゆゑに常の人にはあらず。一生一大事身を過ぐるの業、士農工商の外出家神職にかぎらず、始末大明神の御託宣にまかせ金銀を溜むべし。是れ二親の外に命の親なり。人間長くみれば朝をしらず、短くおもへば夕におどろく。されば天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客、浮世は夢幻といふ。時の間の煙、死すれば何ぞ、金銀瓦石にはおとれり。黃泉の用には立ちがたし。然りといへども殘して子孫のためとはなりぬ。ひそかに思ふに、世に有る程の願ひ、何によらず銀德にて叶はざる事、天が下に五つ有り。それより外はなかりき。是れにましたる寶船の有るべきや。見ぬ嶋の鬼の持ちし隱れ笠かくれ簑も暴雨の役に立たねば、手遠きねがひを捨てて、近道にそれ〴〵の家職をはげむべし。福德はその身の堅固に有り、朝夕油斷する事なかれ。殊更世の仁義を本として神佛をまつるべし。是れ和國の風俗なり。